

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 96 号

平成 22 年 4 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

ヒルティ

「眠られぬ夜のために 第二部」

（草間平作・大和邦太郎訳・岩波文庫）より（11）

9 月 5 日

永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、またあなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることである。

（ヨハネ伝 17・3）

わたしはもうこの世にはいなくなりますが、彼らはこの世に残っており、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに賜った御名によって彼らを守って下さい。（ヨハネ伝 17・11）

よくよくあなた方に言うておく。あなたがたは泣き悲しむが、この世は喜ぶであろう。あなたがたは憂えているが、その憂いは喜びに変わるであろう。（ヨハネ伝 16・20）

わたしは彼らに御言を与えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世のものでないように、彼らも世のものでないからです。わたしが願うのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることです。

（ヨハネ伝 17・14 - 15）

このように、あなたがたにも今は不安がある。しかし、わたしは再びあなたがたと会うであろう。そして、あなたがたの心は喜びに満たされるであろう。その喜びをあなたがたから取り去

るものはいない。(ヨハネ伝 16・22)

ヨハネによる福音書第 17 章は、その第 3 節に、キリスト自身の口から発せられた注目すべき確言を含んでいる。いわゆる使徒信条はもとより、なおあらゆる現代の信条もこの確言に要約されよう、というのは、永遠の生命を得るにはそれ以上なにも要しないと思われるからである。だが、この章はその確言を含んでいるばかりではなく、さらにまた、年老いた人が、別の世界に移りゆく(墓に入るのではない)まぎわに、もし彼がなんらかの思想の担い手であり、しかも子弟をあとに残してゆくとすれば当然いさかであろう感情を、きわめて適切にいい表わしている。とくに第 11 節、14 節、15 節にはそういう感情のありのままの真実がこもっていて、そのことからだけでも、この思い出(福音書)の記者はよほどの老人だろうと、確実に推定することができよう。これはまた、人生の最後の行路の上にもなおも時おり落ちてくるただ一つの哀愁の影でもあろう、もっとも、それは、もうすぐに、そのあとに開かれる未来の行路の光にあかあかと照されるのであるが。

この世においても、人生の比較的重大な一時期から他の時期に移るときには、必ずこのような哀愁感をともなうものである。...

この種の悲しみが時おり現われたら、その前の 16 章 20 節ないし 22 節の言葉によってそれをのり越えるようにし、また、予想されるものごととはとかく困難に見えるが、現実の事柄はそれ自体のうちに困難を克服する力をふくんでいて、かえって容易なものだという、しばしばなされる経験の力をもかりて、そのような悲しみを乗り切らなければならない。

9月8日

(復活のキリストは)そののち、500人以上の兄弟たちに、同時に現われた。その中には既に眠った者たちもいるが、大多数は今もなお生存している。(コリント 15・6)

しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした。(イザヤ書 53・12)

キリスト教の最初の伝道者であり、文筆家であったパウロの手紙は、疑いのない歴史的真實性を持ち、したがって個々の点において真に決定的意義をもつことからの(たとえば復活について、コリント人への第1の手紙15の6の如く)現存する最古の証拠であるばかりではない。さらに、さまざまの教会や個人にあてたこれらの手紙は、多くの重要な教示や助言を含んでいる。これらの言葉は、それにまさる主みずからの言葉(コリント人への手紙7の10-12参照)に次いで、神の霊によって完全に満たされた人の言葉として、われわれにも意義を持つのは当然である。最後に、これらの手紙は、肉体的な弱さを持ち、多くの迫害を受けながらもなお、ついには真に幸福となったひとりの人の実例として、われわれを強くはげましてくれる。その後にあらわれたどの宗教的著述にもまして、これ等の手紙は、多くの激励と慰めと助言を含んで居る。だから、それは、宗教的著述にもまして、これらの手紙は、多くの激励と慰めと助言とを含んでいる。だから、それは、宗教改革者たちにとっても、当時の重大な危機にのぞんで、よき道しるべともなったが、おそらく、またいつか、そのような役目をはたすであろう。ただ、これらの手紙は、それよりもややおくれて成立した福音書の上位に置かれてはならない。福音書はなおより高い型(タイプ)のものであり、たしかにもっと偉大な精神集中力をもって記されたものである。

9月10日

しかし、わたしがあわれみをこうむったのは、キリスト・イエスが、まずわたしに対して限りない寛容を示し、そして、わたしが今後、彼を信じて永遠のいのちを受ける者の模範となるためである。(テモテ 1・16)

信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたは、そのために召され、多くの証人の前で、りっぱなあかしをしたのである。(テモテ 6・12)

自分自身のことは全く語らないのが一番よろしい。口に出してでも、手紙ででも、そうだが、日記のなかではとくにそうである。自讃にわたることは、いやなあと味をもつし、また、自己非難は、われわれの存在と生命の根源である神のみ業に、ともすると触れることになるので、これもなすべきではない。

他人はわれわれを大体において正しく評価するものである。われわれはそんなことを気にやむ必要はない。真に有為な人々がながく軽んじられたためしはいまだかつてない。多くの人々がしっかりした頼りと支えとを必要としているために、おのずからそうなるわけだ。われわれ自身にとっては、あらゆる自己評価の代わりに、そういう他人の評価で十分である。

9月12日

あなた自身の数多くの経験からして、最後には、こういう信念に到達するがよい、つまり、幸福というものは主体的なものであり、自分自身の内に見出さねばならぬものだ、と。たしかに、外的な出来事が瞬間的な幸福感を呼びおこすことのあるのは本当である。しかし、それは永く続くものだろうか、また、だれかある人の生涯に、そのような出来事がたえまなくつぎつぎに起るなどと期待できるだろうか。そうでないことをあなたは知っているし、まただれもがそれを知っている。しかし、もしあなたが、つねに活動的に、誠実に生き、神と和らぎながら、すべての人々に対してゆたかな愛をもって、生きようと決意するならば、そのために間違いなく得られる幸福の実感によって、あなたは困難な時にも、しっかりと支えられるであろう。それどころか、しばしば、苦悩の中においてさえ、あなたは非常に強い心の慰めを経験し、そのために、後になると、この苦しかった時期が、ただ幸福な時としての思い出にのこるのである。

またこうしていれば、どんな外的な幸運にめぐりあっても、あなたは他人に対して高慢や不遜におちいらずにすむであろう、そういう弱点は世間のいわゆる「幸運児」にはつきまといがちのものだが。

9月15日

あなたがたは偽りを捨てて、おのおの隣人に対して、真実を語りなさい。私たちは、お互いに肢体なのであるから。

(エペソ書4・25)

わたしはまた主の言われる声を聞いた、「わたしはだれをつかわそうか。だれがわれわれのために行くだろうか」。その時わたしは言った、「ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください。」(イザヤ6・8)

真実を、ありのまま正確に、誇張することもなく語れ。それができない場合は、沈黙せよ。

9月17日

神の恩寵のもとにあるという意識を除いては、義務を果たしたという意識が、最も強い幸福感をあたえるものである。前者は、いつもそれを受ける資格なしにさずけられるものだから、自分で手に入れることはできない。しかし、後者はたしかに自分で獲得することができる。これは全くあなたの心がけ次第だからである。

9月21日

わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなく、わたしをつかわされたかたを信じるのであり、またわたしを見る者は、わたしをつかわされたかたを見るのである。わたしは光としてこの世に来た。……わたしが来たのはこの世をさばくためではなく、この世を救うためである。……わたしは、自分から語ったのではなく、わたしをつかわされた父自身が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったのである。わたしはこの命令が永遠の命であることを知っている。(ヨハネ伝 12・38 - 50)

ヨハネによる福音書 12 の 38 - 50。この言葉は、この世において神の国をなんらかの仕方で代表しなければならないすべての人々にとって、よい教訓である。まず第1に、彼らは、多くの人たちによって信じられなくても、それを不思議がってはならない。次に、彼らの言うことを心ひそかに信じていながら、なおそれをあからさまに表せない人たちも少なくないことを、平静に受けとめなくてはならない。第3に、彼らはこの世をさばく者ではなく、それを救う者でありたいと思うべきであり、これが肝要なことである。そして最後に、彼らの言葉を軽蔑するものは、すでに自分のうちに裁きをうけていることを確信すべきである。

彼らつねに、神から託されたことをただそのまま語り、それより多くも少なくも語らないようにところがけねばならない。

9月23日

人をさばくな。自分がさばかれないためである。あなたがさばくそのさばきで自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう。(マタイ7:1-5)

いちど、人びとをさばくことをしないで、ともに生きようと試みなさい。出会う人すべてに対して、おのずからその機会が訪れるままに、何か善いことを願ったり、言ったり、行ったりしようとしてみるがよい。そうすれば、それがあなたのさいわいにどんな大きな変化を生じるかに、あなたはきっと驚くことだろう。

9月24日

まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。(マタイ6:33, 34)

神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである。そして、その戒めはむずかしいものではない。(ヨハネ 5:3)

あなたが心軽やかな生活を望むなら、マタイによる福音書6の33・34に従って生活しなければならない。これらの言葉は、わたしの生涯のある時期に、一切の哲学のなしうるような最良のつとめを、わたしのために果たしてくれた。マタイによる福音書11の30、ヨハネの第1の手紙5の3。

9月28日

からだの訓練は少し益するところがあるが、信心は、今のいのちと後の世のいのちとが約束されてあるので、万事に益となる。

(テモテ 4・8)

あなたの天性が人生を厳粛に考える方向にあるならば、おそらく最後には次のような見解に到達するであろう。すなわち、神を愛することが、あらゆることの中で最も善いことであり、また、この神への強い愛は、パウロがその弟子のテモテに言ったように、実際、万事に益となり、「今のいのちと後の世のいのちとの約束」を持つものだ、と信じるようになる。あなたがこのことを一度たしかに悟ったならば、それを堅く守っていくがよい。テモテの第1の手紙4の8。

9月30日

そのさばきというのは、光がこの世に来たのに、人々はその行いが悪いために、光よりも闇のほうを愛したことである。

(ヨハネ3・19)

わたしは世の光である。わたしに従ってくるものは、やみの内を歩くことがなく、命の光をもつであろう。(ヨハネ8の12)

あなたは、この世のどの国に住もうとも、偉大なことや善いことのために、すぐさま多数の人を味方に持つだろうなどと、決して期待してはならない。すべて偉大なことは、小規模に、少人数から始まるものだ。あなたはそれを覚悟しなければならない。そして子供たちを教育するにも、彼らが少数派に属することを平気なように、導かねばならない。...

まだ純粹に靈的でないこの世と、この世における人間のすべての努力との本質は、なかば暗闘である。ただ、われわれにできることは、闇ではなくて光を愛し、そして、たえず一步一步光に近づき、やがてのちには、完全に光に耐えうるようになるために、われわれの全力をつくすことである。

10月2日

しかしわたしたちは、この宝を土の器の中にもっている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。

(コリント 4・7-9)

「元気を失うな、勇敢な人であれ、慰めはしかるべき時にかならず来るであろう。」 この老トマス・ア・ケンピスの言葉は、苦しい時期にしばしば、わたしの心の中で呼びかけられた。そして、やがて慰めが必ずあたえられた。もっとも、それはたいいてい、慰めが切に必要な時になって初めて与えられるもので、決してそれ以前ではなかった。... コリント人への第2の手紙4の7-9, 12の7-10、ヨハネによる福音書12の48-50、ルカによる福音書18の8-21の28。

10月4日

それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けとることが出来ない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたとともにおり、またあなたがたのうちにいるからである。(ヨハネ 14の17)

静かに真理を語れ。少なくとも、あまり激越的な論争的な調子でなければ、それで結構である。しかし、そのためには、是非とも「真理のみ霊」を持っていなければならない。この霊は生まれながらに人間に宿るものではなく、また教会やそのほかの団体にも存しないもので、一人ひとりの人間に対する神の個別的な賜物である。

ヨハネによる福音書 14の17, 16の13, 15の26.

10月6日

わたしは世の光である。わたしに従ってくるものは、闇のうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう。(ヨハネ8・12)

そこでイエスは言われた「わたしがこの世に来たのは、さばくためである。すなわち、見えない人たちが見えるようになり、見える人たちが見えないようになるためである。」(ヨハネ9・39)

「起きよ、光を放て。あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上へのぼったから。」(イザヤ書60の1)。あなたはただ光でありさえすればよい。そうすればきっと輝くであろう。なるほど、闇はあなたを消すために、できるだけのことをこころみるであろう。しかし、それにさまたげられることなく、光りつづけさせるものが、つねに闇そのものの中に含まれている。なぜなら、闇もやはり闇と呼ばれるのを好まず、光とか、開明とか呼ばれたいからである。ヨハネによる福音書8の12, 9の39。

10月7日

すべての人を照らすまことの光があって、世に来た。彼は世にいた。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた。彼は自分のところに来たのに、自分の民は彼を受け入れなかった。しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。

(ヨハネ1・9-12)

キリストの出現は、かつて暗いこの世にあらわれた最大の光であった。そのとき以来、この光はもはや全く消え去ったことがない。しかし、それは時にはあぶなげにゆらめくこともあるが、必ずそのあとまた一段と静かにもえつづけるにちがいない。

ヨハネによる福音書1の6-12、ルカによる福音書11の52。

10月9日

あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう。(マタイ7・2)

人を愛したいと思うなら、しかも、これはすべての人間教育に肝要なことだが、 さばくことをやめなくてはならない。

どんな幼児や生徒、またはそのほかどんな人間でも、彼らと精神的関係に入る限り、あなたが彼らをさばいているかどうか、彼らは本能的に感づく者である。すると、彼らにも、キリストがマタイによる福音書7の2で言っていることが、起ってくる。つまり、彼らもまたさばくのである、しかも厳しい尺度でもって。こうなるともう、信頼のきずなは切れ、憎悪と不信の隔ての壁がきずかれて、あらゆる真の教育はさまたげられる。われわれのすべての学校や家庭が、この病いにかかっている。高等動物を調教する場合でさえ、その通りだということは、馬や犬のことにくわしい人なら、だれでもそう言うことができる。

10月11日

断固として、善を行う人びとのがわに立ちなさい。悪の全勢力に対抗するこの大きな「救世軍」の勇敢な1兵士になるがよい。

また、これを標準として、他人を判断しなさい、ほかの性質や長所に従って、ではなく。

10月13日

あなたの生活のプログラムの中から、すべての無益な仕事、あるいは、すべての単なる怠惰を一掃するがよい。いや、そればかりでなく、あらゆる不必要な、そして実のりのない仕事をのぞき去るがよい。そんな事だけしかやらないような、すべての団体や集会から、さらにはそのような教会からさえ、脱退するがよい。このようにして救世軍は起こったのだし、さらには、その昔、キリスト教も、なお多くの他の偉大なことも起って来たのである。しかし、この世では、有益で必要な仕事よりも、むしろ無益な仕事のほうが、つねにより多くの名誉と結びつき、それを与えられ、しかも、もっと多くの報酬を設けている。こういうことに耐えうるようにならねばならない。

10月21日

人間の天性が十分に「訓練」されて、ついにはすべての善をみずからすすんで、べつだん熟慮しなくても全く自然におこない、また、すべての悪に対して嫌悪をおぼえるようになったら、それは、この世におけるもっとも正しいことであり、かつ、ひとが到達しうる最高の段階である。

10月25日

ある程度は、他人のために心配したり、はたらいたりしなければ、どんな人も精神的に健康をたもつことはできない。だから、家族のためにしばしばつらい仕事をしなければならぬ忠実な母親たち、自分のつとめをただ賃金のための関係だとは解していない正直なお手伝い、すすんで任務を果たす勇敢な兵士、勤め先きの工場の繁栄をもそれ相当に大事にする善良な労働者たち、こういう人びとは、金持ちのなまけ者よりも幸福である。だから、前へ進め、「働いて絶望しないこと」である。しかし、自分一人のためだけではいけない。それでは十分な満足は得られない。